

水質改善に大きな効果

「昭和 46 年当時の多摩川地域の下水道普及率は約 20%程度でしたが、平成 19 年度末では約 97%。普及率の向上に伴い、最近では年間にアユが 100 万匹も遡上し、2,000 万人もの人々が訪れる水辺空間になっています」。こう語るのは東京都下水道局流域下水道本部施設管理課・栗田初男課長だ。多摩地域は戦後の急激な人口増加と産業発展で市街地が拡大。下水道は昭和 25（1950）年に武蔵野市から始まった。その後、流域下水道の導入と三多摩地区総合排水計画（第 2 次）が策定され、東京都は下水道幹線と終末処理場を担当し、市町村は公共下水道整備を進めてきた。現在、下水道整備と高度処理により多摩川中流域の水質は向上、水道水源としても使うことができるレベルにまでなった。



多摩川本流

都民とともに多摩川を守る

多摩川の流域下水道には課題も多くある。未普及地域の解消、雨水・震災対策、さらには地球温暖化防止の推進、事業運営の効率化などだ。現在、東京都下水道局では“経営計画 2007”に基づいて多摩地域の各市町村と協力しながら積極的な取り組みを展開している。例えば、北多摩 2 号水再生センター（合流式）に導入した高速ろ過施設は、高性能でメンテナンスフリーといったことが評価され 2008 年 6 月には経済産業大臣賞を受賞した。また地域とのふれあいにも力を入れている。その一環として「多摩川ふれあい水族館」を多摩川上流水再生センターにオープンし、公開している。「都民に親しまれる下水道を目指して力を入れています。皆様には下水道の“理解者”から協力者になっていただきたいのです」栗田課長は熱く語った。

（肩書きは 2008 年 12 月 5 日取材時のものです）



多摩川ふれあい水族館